

産学連携人材ニーズ交流会実験（情報を専門とする分野） 大学側からの情報提供

大学番号	1. 学士課程の 学習成果目標 ① 設定されている。 ② 検討している ③ 必要性は認める が未検討 ④ 検討予定無 ⑤ わからない	学習成果の目標を具体的に記入下さい。	2. 学習成果の課題	3. 産業界への支援、協力の要望
1	②	資格(基本情報技術者試験)に合格する能力が目安となると考えている。	情報技術者の資格取得のみでない目標(コミュニケーション力、協調性など)をどのように学習させるか、悩ましい問題である。学習成果の目標と情報関係の資格取得との関係をもっと検討すべき。	2年生、3年生春、夏のインターンシップ(企業体験)を充実して欲しい。
2	①	情報処理基本ソフトの構成 機能を理解し、一通りの利用(使いこなし)ができること。また簡単なプログラムが Basic、C、Javaで 組めること。	十分なコンピュータ利用設備が不十分(数量不足、自由にソフトをインストールして実験できる整備が無い)実習をサポートするアシスタントがいない。	情報設備への寄付 および サポート人員の派遣サービス。
3	②	卒業段階で、情報ツールを十分に活用できる知識と技術を修得し、企業において必要と想定されるインターネット、メール、Office全般、データ分析など使えることを目標としている。	情報ツールの活用には、教材ソフトのライセンス契約や独自学習ソフトの購入が必要であるが、更新や取り揃えには経費的な障害となっている。アカデミック版のさらなる普及が必要と考えます。	従来、企業内部だけで行っていた様々なデータ分析や業務評価などを、学生の題材として企業側から提供(当然、守秘義務や企業名は学生に知らさないなどの工夫は必要)して頂ければ、分析・評価の有用性について学生も実体験できるとともに、企業側への第3社評価資料として使えるため、企業側からの情報提供できるサイトがあるとよい。 企業とは就職活動としての接点はあるが、会社訪問や工場見学で担当教員が見学できる機会は少ない。このような機会も積極的に増やしていただくことで、大学側から企業を良く知る機会となって回転しやすくなる。
4	③		学生の関心や勉強意欲の低さ。	実務のニーズや事例、卒業生に必要な知識・技術水準を示してほしい
5	③		「情報通信系」に該当する学科で教えています。技術要素は、演習・実験等を通じて(知識ではなく)学生が自ら使える形に身につけさせる事ができますが、「システムのライフサイクル」や「豊かな社会の実現」のような項目では、座学の講義は行われていますが、学生の身につくリアルな形にする事ができていないと感じています。	
6	②	<p>学士課程(情報系分野)で重要と考えている(個人レベル)ことは、二つの大きく異なる立場があると考えている。</p> <p>1つは情報そのものを実体であるとする立場、例えばCGなどの情報そのものが他の実体とは独立して存在しえるもの。そのような情報を以下に作成するからである。</p> <p>もう1つは情報は実世界の属性とするもので、情報システムを構築すると言う立場は、この中に入ると考えている。情報システムは社会、ないしは物理世界の属性として、いわば組み込みソフトとであるといえる。</p> <p>そのような属性としての情報の場合には、実世界を正確に、あるいは適切に反映したものでなければならない。特に、実世界の問題を情報システムによって解決する道筋を幼稚でよいから、考えることが出来ることを目標とする。</p> <p>具体的には、問題の分析から解決までの道筋を段階を追って、途中を省くことなく、常に内容の確認をしつつ、最終結果にたどり着くこと。漏れのない記述を行うことが大切である。</p>	いくつかの試行をしたが、学生は記述、例えば漏れのない仕様を表現することを抜かして、最終結果のコード化に進もうとする傾向が顕著である。漏れのある論理の筋道では、最終結果は誤ったものが多いことを指摘するが、納得している様子ではない。また、途中で前提条件が異なった場合の記述の改訂を今後織り込むつもりである。	<p>上記の問題は産業界の協力を求めて解決するものではなく、大学独自で可能な問題解決だと考えている。</p> <p>大学生はある授業を受けても、週に一回である。大学の学習の特定の科目についての集中度は産業界での活動とは大きく異なる。一貫性のある問題解決の文書作成が上記の目標である。</p> <p>大学4年間と産業界での勤務期間では差があるが、何よりも増した違いは、新人はいきなり、プロジェクト管理者になるわけではない。産業界からの要請の中に、管理的側面を求めることがあるが、よしんば大学で監理・管理、人に関する話をして、理解が出来ないし、役には立たない。10年後にありえてもそれはほとんど意味を成さない。また、チーム/グループでの活動を大学で実施しても、同じ内容を複数の学生が実施すると、結局誰かリーダーのみが実施していることになりかねず、産業界でのチームのリーダーと担当の違いなどを大学で実行するのは困難であろう。</p> <p>つまり、例えばソフトウェア開発の全工程を網羅するような学習を大学で実施することは適切ではない。</p> <p>産業界では少なくとも過去に何らかの新人教育をしてきたのであろうから、どのようなことが行われてきたかの一部を大学が知ることは良いかもしれない。少なくとも、新人を安い賃金で使おうとする姿勢であれば、論外である。</p>
7	③		現時点で産業界でどのような学習成果を期待しているのかを知りたい	わからない

8	②	(a)「自ら実践しながら学ぶ」習慣が身についていること (b)「背景となる理論の考え方を理解し発展させる」思考習慣が身についていること	・学生の基礎学力の不足(国語、数学、英語) ・学生自身の積極性の無さ(俗な言葉で言えば、ハングリー精神の無さ) ・興味を抱かせる実践経験を積ませる機会の少なさ	・学習した技能を現実社会に役立てるために(演習のための演習でなく)実際の情報システム開発を経験させ、OJTにおいて先輩・上司が指導する内容を学生に経験させることによって、大学における教育の有用性を気付かせる。 ・技術以外に顧客とのコミュニケーション、ドキュメントの重要性、プロジェクト管理の必要性・重要性を経験させる ・ビジネス社会での競争の実態を理解させ、積極性を引き出す。
9	②	本過程では、ITパスポートにすんなり合格する学生は多くないため、J検を経由してITパスポートを取得を目指している。 ただし、まだ模索段階。	産業界が地方中堅大学の情報学部にとどのような人材をもとめているのか、どのような人材であつたら歓迎して貰えるのかが分かれば、学習目標やより立てやすくなると思います。	上記、2に関する企業側の要望を頂戴できましたらと思います。
10	②	本学科では、平成21年度から、高校教員免許状(情報)の資格取得を目標としたカリキュラムを組んでいますので、当面の学習成果の目標は資格取得できるレベルとなります。	問題点としては、学生の関心の持続(あきらめないこと)や目標に対する関係科目間の連携があります。	高校教員免許状(情報)の資格は、特定の情報技術に特化したものではなく、幅広い理解を必要とするので、企業への就職の際の有力な資格としても見ていただきたい。
11	③		カリキュラムは体系的に構成されているが、教員間の連携がうまくいっていない。 企業において評価される能力と大学における教育内容のギャップが克服できない。	産業界において有用と思われる能力を育成するための教育内容をアドバイスしてもらえる場を設けてもらえればよい。
12	①	たとえば、財務会計論応用科目については下記をシラバスに記入している。 1.財務会計の経営的役割と社会的役割を理解している。 2.金融商品の内容とその会計処理の理解。 3.税と会計財務会計の目的・内容が説明でき、社会人としての基本的な会計知識が身に付いている。 4.税務会計を理解し、税効果会計の内容を理解している。 5.外貨建て取引、研究開発取引などの特殊取引の内容が分かりその会計について理解している。 6.国際会計基準の一般的理解をしている。	授業を履修している学生全員が、目的を達成するとは限らず、知識の習得状況に差が生じる。学生の知識レベルに差があり、どちらに的を絞るか難しい。	会計科目について、産業界の具体的要望について知りたい。
13	②	情報処理Ⅰ:Wordを自由自在に使いこなせる。PCでMail(添付ファイル付)ができる。Excelで簡単なグラフが描ける。また、簡単な計算ができる。 情報処理Ⅱ:画像の種類がわかり、JpegやBMPファイル相互の変換ができ、Photoshopエレメントによる画像の合成や編集ができる。また、それらをWordに貼り付け、折り返しや書式を変更でき、テキストとの配置を整えられる。これらの画像を使い、PowerPointでPresentationファイルを作成し、スライドショーの実行ができる。Excelでやや複雑な計算(Copyの種類等も使い分け)やグラフを作れる。WordやPowerPointのWeb化によるHPを作れる。その際、ハイパーリンクによる真間リンクを正しく貼る事ができる。また、Sourceの編集による修正ができる。HTMLタグによる簡単なHPを作り、画像等も挿入できる。そして、その中で、リンクを貼れる。	学生の質問に十分答える時間的な余裕が無く、また、学生数に対し、指導側人数が不足している(複数名のTAをつける事が出来ない)ので、あわただしく、時間が過ぎて行ってしまう、学生も十分わからないまま終わることが多い。最も困るのは、学生の努力と達成度を正しく評価するのに、(TAを含む)指導者の数が全く足りない事である。	上記教育に関しては、TAの人数を増やしてもらおうのが、最も望ましいが、情報処理Ⅲの動画アニメ作成では、実際に社会で役に立つアニメーション等も、学生の興味を喚起するのに役立つと思う。 また、上記には無い研究においては、体の動きと力学的解析の関係を簡単に調べるソフト等、安価に提供していただく事ができれば有り難く思う。
14	③	学部や学科では検討がなされていない。個人的には、コンピューター以外の情報をどのように明示的に扱うかが、文系で情報を強調している学部や学科にとって必要となると考えている。	”表計算ソフトやワープロソフトを使えることやプログラムを使えることが、情報を学ぶこと”という意識をどう変えるかがポイントだと感じている。 ソフトウェアの使い方だけでなく、それを使って何をどうするのかの学習に軸足を移すこと。例えば、ワープロが使えても文章が書けなければ、一人前ではないという意識を持つこと。	ジョブシャドウ(どなたかの仕事を観察する)をお許しいただけるなら、コンピューターを前工程や後工程を目の当たりにすることによって、コンピューターを使用する意味を感じ取ることができるのではないかと思います。

15	③	具体的は学習成果到達目標は設定しておらず、学科の教育目的・目標は設定している範囲にとどまっている。	適切な目標を設定したときに、それに到達できない学生に対して、どの程度の指導が可能かが不安である。	本コースではインターンシップを必修にしているが、関係業界で短大生に対しても短期のインターンシップを可能にしていただけるとありがたいと思っている。
16	①	シラバスに到達目標、評価方法を掲げ、成績評価基準を「到達目標について、全てを総合して成績の得点により5、4、3、2、1」に設定している。	・学生の「質」の問題 ・それに伴う授業の「難易度と成績の評価」	・情報系の「資格」は、有効か。 ・入社して、この分野の研修や資格のための援助はあるのか。
17	③		学習成果について適切な目標を掲げると、半数以上の学生を卒業させられない。	学生の興味を喚起するため、また問題解決型の能力を養うために、問題解決型の演習・実験への支援をお願いしたい。実社会からの課題の提供、指導人材(例えば適当な定年退職者の紹介)、企業で不要となった機材の提供など。
18	①	本学部の教育の目標は、以下の能力を養うことである。 (1) ICTの専門知識を問題解決に活用できる能力 (2) 人間の営みを人文・社会的な見方で捉える能力 (3) 情報科学的な見方で考える能力 (4) 他者と有効にコミュニケーションと協業ができる能力 (5) 科学・技術が現在ある所以を理解し、自律的に行動できる能力	本学部は平成21年度開設の学部であり、一学科制をとっている。 高校における文理クラス分けの枠を超えて学生を受け入れ、第一級の情報の創り手・使い手を育成することを学生教育の目的とし、これに沿った新たな情報系学問領域の展開が教員にとって課されている。 情報学の本質を見極める哲学の涵養、自律的に知識を習得する力の養成、グループ活動を進めるソフトスキルの習得を促すべく、理論と実践を重視した教育を進めつつあるところである。 学士課程の基礎理論について、講義と演習を高頻度に反復する教育を実施・点検・改善することが、これからのすべき主要な課題である。	本学部の教育活動は、緒についたところである。今後、産業界からのご協力のご支援は欠かせない。 特に以下の3点をお願いしたい。 学士課程の初期段階において、ユビキタス社会の幅広く深いICTの利活用のニーズや展開状況を気付かせること。講義等へのご支援をお願いしたい。 学士課程の中・後期段階において、専門理論と実践力を習得させること。講義・演習・インターンシップ等へのご支援をお願いしたい。 大学教員が最先端のICT技術を深く理解し、自ら講義演習の教育活動と研究活動に生かすこと。教員の研修等へのご支援をお願いしたい。
19	①	情報とコンピュータの、基礎理論、ハードウェア、ソフトウェア、応用分野(画像処理、ロボット、ウェブ、メディア、情報システム、...)について、深くバランス良く学ぶ。 より具体的に詳しくは、 科目一覧 <a href="http://www.cs.meiji.ac.jp/curriculum-j.html">http://www.cs.meiji.ac.jp/curriculum-j.html</a> 各科目の学習目的 <a href="http://oh-o.meiji.ac.jp/index.htm">http://oh-o.meiji.ac.jp/index.htm</a> をご覧ください。	理工系情報学科全般については、情報処理学会のサイト「情報専門学科におけるカリキュラム標準J07」 <a href="http://www.ipsj.or.jp/12kyoiku/J07/J0720090407.html">http://www.ipsj.or.jp/12kyoiku/J07/J0720090407.html</a> が詳しく、これを見るのがよいと思います。	一つの留意点ですが、理系情報学科は、機械系学科や電気系学科と違って、学科の内容の違いが大きく多様であることを、受験生と同じく産業界も(たとえば学生採用にあたって)、具体的に個々の学科に対して理解をお願いしたいと思います
20	②	企業の資金調達、間接金融から直接金融に変化し、会計制度も国際会計基準IFRSの適用により、留学生を含めてPCを利用した教育によって主要な企業の財務諸表をもとに収益性、安全性、生産性及び成長性分析を行い、投資家分析を行う。当該教育を行うためには、しっかりした基礎・基本教育を行うことも重要である。	国際化、情報化時代において国際会計基準が重視されつつある今日、日本の企業ばかりでなく留学生の本国の企業分析もできることが好ましいと思われる。	大企業ばかりでなく中小企業も、当該企業のホームページに財務諸表を開示していただきたい。『答申に「社会人の再学習需要の高まりや、経済情勢・雇用形態の変化を踏まえ…リカレント教育に対応した」と述べられているように、地方の中小企業の再教育の場として活用することも検討して貰いたい』
21	①	コンピュータを中心とした情報化社会の発展に貢献できるような志と技術、そして発想力を持った人材を育てたいと考えています。時代の流れに対応したカリキュラムと、実験や研究に熱心に取り組むことができる施設と設備を整え、教員と学生が互いに顔が見えるコミュニケーションを重視しています。学生の好奇心を刺激する環境作りを力を入れ、常に新しいものを作り出す創造力を養うため、産業界や企業との連携も積極的に行っていきたく。コンピュータを中心としたハード・ソフトのさまざまな技術によって、電子計算機をはじめ、デジタルカメラやIT家電など、各種のデジタル機器が作り出されています。まさに、技術立国・日本の中でも、もっとも注目を集めるのがデジタル技術であり、製品の品質を支える、すべての共通基盤となる重要な部分です。現実のデジタル機器に使用されている、より高度な技術についても、自ら学んでいけるだけの基礎知識を習得していきます。	文系分野と理系分野の違いがありますのでそれぞれについて述べます。 まず、文系分野においては、高度情報化時代を迎え、生活とビジネスに情報機器をいかに活用するかが重要な課題となります。知識・情報の生産は、自ずと高まってきますのでその利活用をめざすインテリジェンス能力が重要となります。したがって、インテリジェント能力を有した人的資源の活用と競争力の確保のために教育環境が整備されなければなりません。学部教育はあくまでも基礎にベースをおき、大学院レベルには社会に役立つ技術力、インテリジェンス能力を高めることが重要でなります。その供給源としてわれわれの使命がありますので、社会のニーズと変化を対外的な企業や社会から学習したいと考えています。 理系分野においては、社会に必要とされるインテリジェンス能力をイノベーターの要請が必要です。製品の技術や品質だけでなく競争力を生み出すイノベーションをいかに創発できるかが重要ですから、そのためのノウハウを産業界から学んでゆきたいと考えています。	コンピュータを中心とした情報化社会の発展に貢献できるような志と技術、そして発想力を持った人材を育てたいと考えています。時代の流れに対応したカリキュラムと、実験や研究に熱心に取り組むことができる施設と設備を整え、教員と学生が互いに顔が見えるコミュニケーションを重視しています。学生の好奇心を刺激する環境作りを力を入れ、常に新しいものを作り出す創造力を養うため、産業界や企業との連携も積極的に行っていきたく。支援、協力については、技術提供・共同研究が必要、多摩TLOにおける知的財産の起業化プロジェクトを進めており、起業と商品開発に成果を上げています。例えば、バイオテクノロジーの成果としての「創輝」の商品化、環境監視衛星の開発などがあります。
22	②	社会人の養成	到達目標の設定が難しい。 キャリア教育の位置付けの検討が課題。	キャリア教育への支援 企業の求める人材教育の在り方への助言、支援

23	②	資格(基本情報技術者試験)に合格する能力が目安となると考えている。		
24	③	具体的な学習成果到達目標は設定しておらず、学科の教育目的・目標は設定している範囲にとどまっている。	適切な目標を設定したときに、それに到達できない学生に対して、どの程度の指導が可能かが不安である	本コースではインターンシップを必修にしているが、関係業界で短大生に対しても短期のインターンシップを可能にしていただけるとありがたいと思っている。
25	③	(文系学部)情報リテラシーを身につける、ITパスポート試験に合格する程度の知識を身につけること、を当面の目標にしたいと思う。	情報システムの活用についてうまく実施できない。	・有効な情報システムの共同開発、アンケートシステムの構築 ・ITソリューションに関する事例の紹介および講義を産業界にしていただく
26	⑤			私は、情報を主専攻としていなかったが情報系に就職した・したい学生に対する現状・課題・アドバイスを聞かせていただきたいです。例えば、卒論・修論でシミュレーションモデルをプログラミングする等の経験から情報系に興味を持った学生など。
27	②	社会人に必要な情報力を身に付けさせ、情報関連資格の修得を奨励する。	学生に「社会人に必要な情報力」の重要性を認識させることは必要である。	大学1年次からのインターンシップ機会を増やして欲しい。
28	⑤		短期大学レベルの情報教育における成果としては、情報機器の基本的な操作がスムーズに行えることが求められていると思う。 高等学校でも一定の教育がなされている状況の中で、現実的に大学に対して産業界が求めている水準がどの程度にあるか私の 周辺の教育現場では把握していないのが実情である。 高度な情報技術を要求される業界・職種であれば当然として、一般の企業における事務職等を想定した場合に求められる指標がほしい。	産業界が求める人材の中で、特に短期大学の卒業生レベル＝企業活動においては一般職相当職に適合した情報技術ないしは情報倫理に関して期待する指標がほしい。
29	②		目標の設定基準 教員間の学習成果目標の調整 設定目標の産業界における検証方法 学習成果に対する評価	目標設定段階での協力体制構築 学習成果に対する評価への協力
30		具体的な目標は設定していない	学生の基礎学力が低下しており、学習成果の目標に照らして評価できる状況にない。情報処理技術者としてのミニマムリクワイアメントを明確にして学習成果の目標レベルを設定する必要がある。	インターンシップによる実体験の場の提供に協力していただきたい。
31	③	もしかすると、学科内で検討されているかもしれませんが全教員に周知されていないかもしれません。	学生自身の「目標」と「学習すること」がきちんと結びついていないように思います。 カリキュラムの中で自分のキャリアパスを明確にしていくべきだとは思っています。 それを、学生にも見える化し、学習することにもっと明確な目標を持ってもらいたいと思います。	産業界からの求める人材のスキルなどをカリキュラムに組み込み、学生が目標意識を持てるようにしたです。 このカリキュラムを取ると、自分は社会に求められるこういった人材になれると学生に思ってもらいたいと考えています。 さらに、特定の会社などと契約を結び、独自の人材育成を行ってその会社に送り出す、などができるといっています。 私の学科は文科系の中にある情報関連学科です。 私が学生の頃の理料系の大学では契約をしているわけではないが、研究室と会社のつながりがあり、 共同研究などが行われていました。 共同研究は行われなくても、文系でも要望に合った人材を育ててつながりを作ることはできるのではないかと思います。
32	③		学習成果が具体化されておらず、科目及びその内容が、体系化された状態に有るとは言えない。 まずは、学部の学習成果を具体化する検討から始める必要がある。	産業界との連携との必要性は強く感じているが、現在、その検討の状況にまだなっていない。
33	③		課題の設定に対する産業界との連携 評価手法(特にグループワークを中心とする場合)	プロジェクト演習(3・4年生)や研究ゼミナール(3年生)、卒業研究(4年生)等で、産業界の方々からのご支援や、学生の取り組んだ成果物に対する評価やコメントをいただける企業様を探しております。また、インターンシップも積極的に実施しております。
34	③	経営学部は経営とマーケティングの2学科で、1学年の定員は各学科とも200名で、学生数は全体で約1900名になる。マーケティング学科の中に「情報マーケティング」分野(メジャー)を置き、経営情報系の科目群を19科目配置している。新入生は学科基礎の「情報リテラシー」から学び始める。1クラス約120名で、4クラス開講し、主にパソコン実習である。春は情報とは何かを理解し、情報を扱うための知識や技術を習得する。秋は情報化が社会に及ぼす影響を理解し、社会に貢献するための情報処理能力を修得する。4人の授業者とも内容について協調し、理解度が同程度になるように留意している。試験は担当者別で、統一試験ではない。また、教養系の基本科目とは独立している。2年次から、プログラミング演習やマルチメディアなどの小人数の演習クラスで学ぶが、多くの科目は対面講義で、パワポなども活用されている。2～3年次に「ITパスポート試験」に合格させるために、別途、時間外に集中講座を開講し、毎年数名の合格者を輩出している。	全体の目標が抽象的であるので、具体的な課題を設定する必要がある。科目間の授業内容の整合性や、理解した内容を活用して、読み・書き・計算などの問題解決能力を養成する必要がある。現代の経営活動の高度で複雑な諸問題を解決する処方箋を提案し、実践するベンチャースピリットも要求される。このためには、情報技術を活用することはもちろんであるが、少人数教育により、対話型授業の質を高めることである。理論と実践を融合させるため、ワークショップ形式を活用する。戦略的な経営情報へのニューフロンティアを開拓し、ビジネス社会に有用な人材を輩出する。科学的な基礎を学び、分析力の上に、判断力を培うために、コンピュータを活用したシミュレーション技法や、数値情報の可視化技術などを活用し、生活者(消費者)にウェイトをおいた生産システムや流通ネットワーク、インターネット社会への理解や倫理規範などを体得させる。	理論と実践の橋渡しとして、郊外学習を取り入れ、実社会の知恵を学生に体験させる。冠講座に止まらず、カリキュラムの中に組み入れ、非常勤講師を越えて、客員教授の活用などにより、優れた社会人講師による単位認定も有効である。これまでのゼミナール(演習)が教室内での課題解決が中心であったが、フィールドワークを取り入れることにより、海外での外国人学生との共同学習や、インターンシップなどの職業体験学習も人間力を高めるのに有効である。奨学金も充実させたい。

35	③	・問題発見と解決能力(科学的/社会的思考と実践的開発力)の養成	・学習意欲の低下、知識の断片的理解、課題設定力の不足、 ・目標追求に関する持続的・系統的な思考・意欲の不足。 ・基礎学力の低下、実践的学習機会の不足。 ・上記課題を解決する教育方法・仕組みづくり。	・社会的場=企業の現場での実践的学習機会の提供。 ・企業の開発部門等で活躍されているエンジニアの方の講演、及び交流等の機会。 ・上記2つの機会を仕組みとして機能する取組へのご協力。
36	①	社会科学系学部学生の情報系分野の目標としては、「ITパスポート」水準を第一の目標として設定しています。他、学生の希望やレベルに応じて追加の目標設定をしています。(例:基本情報技術者、ネットワーク系資格水準)	ITパスポート自体が、まだ始まったばかりの制度なので、学生の認知度が低く学習意欲へのつながりが薄い。そのせいか、資格試験受験者も非常に少なく、残念に思う。	ITスキル標準は、学生には理解が難しく習得も困難であり、しかしITパスポートなどの情報系資格の評価は、即実践レベルとは認識されていないことがあるため、就職活動との連動を考えた場合に、学生が混乱する例が見られる。実践レベルに適切しやすい学生向けスキル標準のようなものが、早く認知されてほしい。
37	①	・高度情報化社会に対応できる人材となる ・企業、産業界で必要とされる人材となる	学力の低下。FDによる教育力の向上	産学連携による学生に興味を持たせる場の提供。
38	①	本学の教育理念であるKVA精神に基づき、個人が自立し、専門職業人として社会貢献できることを目標とする。すなわち、生活を豊かにする情報のシステム、コンテンツ、メディアおよび経営経済に関する知識や技術、さらに、それらを活用する能力を習得し、社会で自立することをめざす。	これまでの学部学科の見直しをおこない、新規体制は次年度から適用実行します。したがって、現状を踏まえた課題につきましてはこれからです。	業界を理解する観点でのインターシップの充実、さらに技術や専門知識の有効性と有用性を確認できる産学での共同開発が重要と考える。
39	⑤	前身が経営情報学部であったが、ビジネス学部経営デザイン学科と別学部の情報デザイン学科に改組し、その後、ビジネス学部へ属して情報関連の授業を行っているため、情報リテラシー関連の目標は検討中ですが、学士レベルの目標としては分かりません。		
40	②	芝浦工業大学では平成21年度より、文部科学省大学教育推進プログラム【テーマA】「工学系技術者のソフトウェア開発技能育成」に取り組み、工学のあらゆる分野において、その基礎教育としての重要性が高まっているソフトウェア開発技能育成のための到達目標とそのカリキュラムを検討している。	\$45-F~MsK¥3X2J\$G\$O!=""%U%H%&%"3+H/5:=Q<T\$N0i@.\$N\$?Sa\$K!<BA)E*\$J%=%U%H%&%"9)3X650iH\$7\$F%=%U%H%&%"3+H/<B=、PBLを8年間実施している。オブジェクト指向による3か月強の開発(Webアプリケーション等)を通じてソフトウェア開発を体験する。本授業ではソフトウェア工学の教育目標からプロダクトの品質(機能性・使用性・保守性)の作り込みおよび、履修者の知識(開発技術+コミュニケーション能力)の向上を目標とし、これらの目標達成の要因を分類し、この分類に基づき実習の設計を行った。さらにソフトウェア開発実習プロジェクトをプロダクト(成果物)、プロセス(実行の仕方)、グループメンバー(実行する人)のコラボレーションの3つの要素で構成されると捉え、これらの達成目標に対してグループおよび個人の観点から評価モデルを定義し、実際に評価を行った。この実習を行う上で、重要なことは、前提となる知識の教育カリキュラムである。本学科でも様々な取り組みをしているが、大きな問題は、基礎的なプログラミング能力の育成をどのように行えば、全体的にプログラミング能力を高めることができるか。	現在模索中である
41	③			
42	②	「知識集 == 学習成果の目標設定」とは考えられる。ただ、目標設定とその管理を行なうまでの運用にはなっていない。	知識集とくに学士力の運用面。 学士力の学習成果は単位の取得や成績とは必ずしも結びついていないと考えられるため、学士力学習成果のより正しい評価方法が急務といえる。本学では、現在、その試行が始まっている段階である。	
43	②		大学入学時の学生のリテラシー能力の差が大きいため、1年次に必修にしているパソコン基礎の意義が問われている。習熟度別にするには、コマ数、時間割、教員と助手の確保等問題が多い。次のステップの応用のコマでは、各学科独自の内容にするために	習熟度別を判別できるまたリテラシー教育を実施できる内容の安価なe-Learningコンテンツの提供をして頂きたい。
44	①	カリキュラム体系の全体的整合性と相乗効果の評価・測定については確認ができていませんが、それぞれの科目での教授要目(シラバス)に明記しており、学生には示されています。また前・後期とも各2回の授業アンケートが実施されていて、相互の改善方向の確認も実施しております。	一般教養とそれをベースにした専門能力の習得が基本ではありますが、社会なかでも産業(企業)から求められる能力が確実に高度化・多様化する知識創造時代にあつて、いかにに力強く社会貢献、生きていく力を身につけさせるかが、学士課程教育の課題かと思われれます。しかしながら、大学全入時代にあつて、入学時点での学生の問題意識、学習意欲と能力レベルのバラツキが相当あつて、受講生各人に合わせて均一的な成果目標の設定そのものが問題であり、学習成果の測定・評価確認と達成内容における指導およびその度合いをいかにチェックするかの進捗管理が課題。	①就職活動開始の早期化の問題②インターンシップの受け入れの拡大と長期化③大学教職員(学生)と企業との交流システムの拡大とPRおよびニーズとマッチングの仕方④産学連携の実質的な目標設定と評価方法、モチベーションづくり